

FRONTIERS OF SOCIAL RESEARCH SYMPOSIUM 参加報告書

(2025 年 11 月 4 日～5 日 オーストラリア アデレード)

豪州で「居場所」を再確認する旅

佐藤 祐菜

東京大学社会科学研究所 特任研究員 (PD)

2024 年度奨学生

11 月 3 日午後 3 時、東京からシドニー経由の長いフライトを終え、私は懐かしい地に降り立った。2 年前まで 1 年間を過ごした、南オーストラリア州のアデレードである。南半球は夏を間近に控えているはずが、思いのほか肌寒く、雨と風が強かった。そのままスーツケースを引き、路線バスで市内へ向かう。約 30 分の道のりだ。窓から眺める郊外の街並みを見ながら、「思ったよりも『異国』という感じがしないな」と思った。留学していた頃からそれほど時間が経っていないからかもしれない。

アデレードは、人口規模でオーストラリア五番目の都市である。シドニーやメルボルンのような大都市ではないが、程よい大きさが暮らしやすいコンパクトシティだ。中心部は（頑張れば）徒歩でも回れる範囲で、バスやトラムで 30 分も走れば山（アデレード・ヒルズ）や海（ビーチ）といった豊かな自然に行き着く。地元の人々は「アデレードは小さい」と自嘲気味に言うが、私はむしろ「シドニーやメルボルンよりも、コアラやカンガルーなどの野生動物に出会える確率が高い」と謎の誇りを感じていた。

今回アデレードを訪れたのは、南オーストラリア大学留学時代の指導教員と日本の母校・慶應義塾大学の指導教員らが共催するシンポジウムに参加するためだった。これまではオーストラリア側の先生が慶應を訪れていたが、今回は慶應側の院生がアデレードを訪れ発表を行うという趣旨である。南オーストラリア大学やアデレード大学の大学院生・研究者も登壇予定だった。私は 2 日目のラウンドテーブルでパネリストとして招かれていた。指導教授からは「Zoom 参加でもよい」と言

われたが、「せっかくの機会なので現地へ行きたい」と伝えた。渥美財団の支援のおかげで、それが実現した。シンポジウムは 11 月 4～5 日に開催され、慶應の先生方や院生は 2 日に到着していたが、私は 3 日に現地入りし、6 日の便で東京に戻る予定だった。到着日の夜は、慶應の後輩や先生方との再会を喜び合った。その中には、南オーストラリア大学に留学中の中国人の後輩 2 名もいた。皆と語り合いたかったが、翌日の発表を控えた後輩たちは少し緊張していたようで、この日は早めに解散した。



(写真上) アデレードの街並み

翌日のシンポジウムでは、さらに懐かしい顔ぶれに出会った。留学時代の先生方、そして登壇予定だったインド系オーストラリア人の友人とも偶然再会できた。発表は朝 10 時から夕方 5 時まで続いた。オーストラリア側の発表は犯罪学、社会学、言語教育学など多様で、普段触れないテーマも多く刺激的だった。慶應の後輩の発表はより馴染み深く、研究の進展を聴いて、指導教員でもな

いのちに胸が熱くなった。発表後は会場近くのパブで夕食を共にし、地元のビール「Coopers」を片手に語り合った。南オーストラリア大学の指導教授からは、私が5月に提出したブックプロポーザルが採択されたとの知らせもあり、気分は最高潮だった。翌日に控えた登壇をしばし忘れ、夜遅くまで先生方や後輩たちと三次会まで盛り上がった。

翌日はシンポジウム2日目。午前中に私が参加するラウンドテーブルが開かれた。テーマは、アーリー・キャリア、ミドル・キャリア、シニア・キャリアの研究者が、学術論文や書籍出版について語り合うというものだった。私はアーリー・キャリアの立場で参加した。英語圏におけるジャーナル偏重とモノグラフの重要性、研究者キャリアにおける日豪の評価基準の違い、博士論文と書籍の構成の差、執筆やプロモーションの方法などが議論された。単著を準備中の私にとって、先生方の助言は大変参考になった。私も博士論文やブックプロポーザル作成について、初めて先輩の立場から後輩たちに経験を共有した。和やかで温かい雰囲気の中、実りある時間となったと思う。



(写真上) シンポジウムの様子

午後は自由時間ができたため、自然公園やビーチを訪れた。野生のコアラやウサギに加え、偶然イルカの群れを見ることができた。アデレードで野生のイルカに出会ったのは初めてで、思いがけない幸運だった。その夜は留学時代のハウスメイトの新居に泊まり、翌日は友人たちと再会を楽しみ、アデレードを後にした。

今回のシンポジウム参加は、他の国際学会のように新しい土地で人々と出会う興奮とは少し異なる。それでも、日本とオーストラリアそれぞれに「居場所」があると確かめられた貴重な機会だった。文系研究者は一人で研究を進めることが多いが、やはり励まし合える仲間が存在は欠かせない。対面での再会を通じて、今後の研究と教育への新たな意欲を得た旅だったと感じている。